

乳幼児期における食具の使い方に関する研究 — 0・1・2歳児クラスの保育におけるスプーンをめぐる —

伊藤 美保子^{*1}・西 隆太郎^{*1}・宗高 弘子^{*2}

The Use of Spoons in Early Years: Care and Education in Classes for Children under Three

Mihoko ITO, Ryutaro NISHI and Hiroko MUNETAKA

This article explores the use of spoons in early years. Although early years practitioners are highly interested in the usage of tools in dietary education, earlier studies in Japan focused virtually only on chopsticks. As there are fewer studies on spoons in early years, we conducted a survey of spoon usage in preschools. We asked practitioners in 10 preschools and collected data of 469 children in classes with children under three. From the survey, we found the following; 1) children master their grip of the spoon around three years old, and the process of mastery takes due time in classes for children under three; 2) practitioners sympathetically support this process with various interventions; 3) the process is related to children's development in other areas, especially play. It is suggested that this survey inspired practitioners to closely observe children's development. Inquiry into a longer-term survey will be needed for further research.

Keywords: Care and education, Spoon, Children under three

1. 問題・目的

乳幼児期の保育において、食べるということは重要な意味をもっている。子どもたちは乳幼児期の数年間をかけて、食具を使って自ら食べる力を身につけていく。大人の介助を受けつつ食具を持ち始めるところから出発して、少しずつ自分自身で使えるようになり、やがて日本では箸を使いこ

なせるようになっていく。とくに3歳未満児クラス(0・1・2歳児クラス)の場合はスプーンが主であり、はじめて出会い、使いこなしていく食具として重要である。この時期の保育を考える上では、子どもたちがどうスプーンを使っているか、その使い方がどのように変遷していくかといった実態や、その過程を支える保育者の配慮などについて知ることが重要である。

キーワード：保育，スプーン，0・1・2歳児クラス

※1 本学人間生活学部児童学科

※2 元 就実大学

食具の先行研究としては、箸の持ち方の発達に関する山下（1955）によるものが挙げられる。一方、より幼い時期のスプーンについての研究は数少ないのが現状である。したがってスプーンについては、まずは箸などを含めて関連する研究を整理しておく必要がある。その上で、子どもたちの実態を把握するために、量的・質的両面からの研究を行うことが有効だと考えられる。

質的研究においては、量的研究では捉えがたい個別的、状況的な側面を見ることができる。実際に保育の中で幼い子どもたちが食具を使いこなしていく途中の過程を見ていると、一人ひとりが本当にさまざまな持ち方をしていることに驚かされる。保育者が、日々その様子をこまやかに捉える眼をもつことができれば、それによって食事の際の援助もより豊かにされるであろう。また、こうした手指の発達は食事の場面ばかりでなく、遊びをはじめとする生活全体との関連の中で進む過程である。このことから、保育者は食具の指導だけにこだわるのではなく、たとえば遊びの中での手指の使い方にも目を留め、それを踏まえて援助を考えていく視野が求められるであろう。こうしたホーリスティックな視点からの質的研究も、保育という実践について理解する上では重要と考えられる。

2. 目的

3歳未満児の食事場面におけるスプーンの使い方について、量的・質的両面からの研究を行う。

量的研究においては、保育現場の食事場面について、3歳未満児の子どもたちを対象に、スプーンの持ち方を中心とした実態を把握することを目指す。類似の調査が少ないことから、調査の枠組をどう設定するかが一つの検討課題となる。

質的研究においては、食べる営みを支え

る保育者の援助のあり方、食事以外の場面における手指の使い方との関連等について理解することを目指す。また、保育者による自由記述に加えて、子どもたちの実態をより具体的に理解するために、筆者らも保育現場における観察研究を並行して実施した。遊びとの関連など、質的な側面についてはこうした研究によって捉えられる部分が多いが、本論文では調査を中心に扱うこととし、観察研究については機会を改めて報告することとする。

なお、本調査は6か月にわたって毎月継続的に実施しているが、本論文では調査初回に得られたデータのみを対象とすることで、まずは3歳未満児のスプーンについての全体像をつかむことを目的とする。

3. 方法

本研究では、3歳未満児の食事場面におけるスプーンの使い方について、(1)先行研究の検討を通して調査の枠組を設定し、(2)保育現場における調査を実施した。

(1) 先行研究の検討と調査枠組の設定

乳幼児期の食具に関する先行研究をもとに、スプーンの持ち方を中心とした調査項目を設定する。項目については、文献だけでなく、筆者らの保育経験・観察経験を参照し、現職の保育者らとのディスカッションを行い、保育実践の経験を参照することで、日本の保育現場に即すると考えられるものを設定した。これに基づいて、子どもたち一人ひとりの実態を記入するための調査用紙を作成した。

(2) 保育現場における調査の実施

①概要

3歳未満児の保育にあたっている保育現場（公立保育園5園、私立保育園4園、私立幼保連携型認定こども園1園、計10園）の協力を得て、毎月1回、該当クラスの子どもたち一人ひとりについて、前項で作成

した個人票を用いて、食事場面でのスプーンの持ち方および関連する情報を記入するよう依頼した。可能な場合には、食事場面でスプーンをもつ姿の写真も提供いただいた。調査への回答・個人票への記入については、園の業務量との関係から、「基本的情報」「スプーンの持ち方・食事の状況」以外の自由記述（「保育実践との関連」「写真」）については、可能な範囲で協力いただくこととした。

②調査期間

本調査は、X年9月～X+1年2月の半年間にわたって、毎月1回、対象園に在籍する3歳未満児の個人票に記入いただいた。時期については、子どもたちの全体的な状況をつかむために半年間を設定している。保育現場では年度末の3月に協力いただくのは難しいことから、9月から2月までの6回とした。本論文ではそのうち初回の9月分のみを取り上げる。

③対象児について

調査開始時（X年9月）における対象児数を表1に示す。園の在籍クラスは4月時点の満年齢で決まるため、調査時の実年齢とは差が生じる。そのため、表1には調査開始時の実年齢を各年齢の前半・後半に分けて示した上で、在籍クラス（園で何歳児として扱われるか）についても付記した。以下、「～歳」は実年齢を、「～歳児」は園でのクラスを示すものとして用いる。

表1 対象児の概要（調査開始時）

	実年齢		在籍クラス
	前半	後半	
0歳	前半	0	0歳児クラス 77
	後半	6	
1歳	前半	71	1歳児クラス 183
	後半	83	
2歳	前半	100	2歳児クラス 209
	後半	85	
3歳	前半	124	
	後半	0	
計	469		

④倫理的配慮

調査によって得られた個人情報・記録は、研究目的以外には使用せず、プライバシーを守ることを了解いただき、各園からの協力を得た。写真については、研究目的での利用について保護者からの承諾を得ている園から、可能な範囲で提供いただいた。

4. 先行研究の検討と調査枠組の設定

(1) 先行研究の検討

すでに触れたように、3歳未満児のスプーンに関する研究はあまり多くないのが現状である。

乳幼児期における食具の使い方に関する早期の研究として、山下俊郎によるものが挙げられる。彼は、多くの子どもは3歳から箸を持ち始めるが、早い子どもは2歳台でも持つことから、2歳から6歳までの幼児を対象として、箸の用い方、すなわち「用箸運動」の発達を調査した。フィルムを用いたこの観察研究から、彼は用箸運動の発達段階を7段階9類型に分類している（山下, 1955, p. 94）。この類型を図1に示す。

	前面Ⅰ はさむ所	前面Ⅱ 口に入れる所	側面Ⅰ はさむ所	側面Ⅱ 口に入れる所	註
1					さじと全く同様にはしを握る持ち方
2					いわゆる「握りばし」
3a					握りばし、さやゆやくく握ることで握り方がやや自由になる
3b					人さしと中指がやや独立に働きはじめる
4a					人さしと中指が狭む隙に鋭い始められる
4b					人さしと中指の隙に押える際に小指が用いられる
5a					親指と人さし指/中指はしを握りつけて親指と中指の間にさやゆやくく握ることで握りばしはじまる
5b					親指、人さし指、中指の3つが同時にさやゆやくく握ることで握りばしはじまる
6					親指と人さし指は中指で一方のしを握り、親指と中指は握りばしを握り、一方のしは握りばしを握り、一方のしは握りばしを握り
7					大人の正しい持ち方

図1 用箸運動の発達（山下, 1955）

この山下による研究は、その後の多くの研究者が参照する古典的なものとなっているが、「用箸運動」を調査したものであり、3歳未満児が用いるスプーン等については、わずかに触れられているのみである。

山下以後の研究では、箸を使いこなせる姿を望ましいものと見なして、その意義やそのための指導を論じるものが主である。広沢ら（1990）は保育者の立場から箸の持ち方に関する指導について論じ、山下の資料との比較を試みている。一色（1998）は文化史的観点から、食具を用いる手の働きが人間にとってもつ意義について論じている。一方、食具の使い方に関連して、現代の子どもの手が不器用になっていると警告する文献も見られる（丸山，2008；谷田貝，1984）。時代の変化や保育環境の違いが、子どもたちの食具の使い方に影響を与えることは考えられうるし、またいつの時代も変わらずこうした指摘がなされてきているとも言えるだろう。しかしこれらの研

究においては、3歳未満児がスプーンを持つ上で適切な援助・指導がどのようなものか、具体的な言及はほとんどない。

山下の研究を箸以外の持ち方に応用したものとして、伊与田ら（1996）の研究が挙げられる。彼らは保育園児を対象に食具を使って食べる行動の発達を調査し、持ち方の分類を作成している。ただ、この研究では3歳未満児はフォークを用いており、スプーンを用いる一般的な保育現場とは異なっている。彼らによるフォークと箸の持ち方の分類を図2に示す。

摂食行動の観点からは、より3歳未満児の実態に即した研究がなされている。向井（2000）は歯学の立場から摂食行動の発達が著しい乳幼児期について、口とスプーン的位置関係、皿とスプーンを動かす手の動きの関係など、スプーン食べる発達変化を示している。一方、保育的観点から注目されるスプーンの持ち方については、詳しく言及されているわけではない。

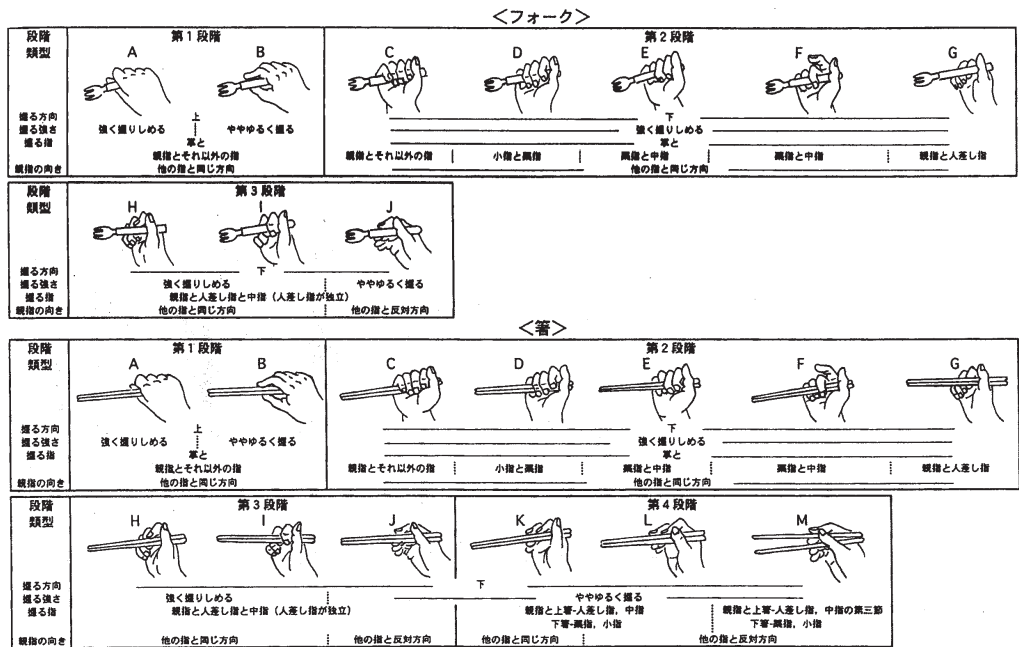


図2 フォークと箸の持ち方（伊与田ら，1996）

児童心理学者のGesellは大規模で克明な観察調査を行い、乳幼児の行動発達を論じているが、とくに乳児期の食行動についてはGesell & Ilg (1937)に詳しい。スプーンに限らず授乳を含めた摂食行動が、状況の認知、手や口の動き、意志や感情の表現、援助する大人との関係など、幅広い視点からまとめられている。スプーンについては、差し出されたものを認知し反応すること、食べる行動のパターン、食欲と満腹の表現といった視点を取りあげられている。そのうち、食べる行動については、スプーンの持ち方、スプーンを皿から口まで運ぶ腕の動き、スプーンを口に入れる向きなどについて、発達の大まかな流れが説明されている。乳幼児期の「食べる」行為について考える上で、感情や関係性を含めた全人的な視野が示されている点は大変興味深い。

以上のように、日本における先行研究からは、3歳未満児の子どもたちは主としてスプーンを使用しており、箸を使い始めるのは3歳児あるいは2歳児クラス以降だと言える。一方で、日本では3歳以上児クラスでの箸の持ち方指導に関する研究が多く、3歳未満児の主にスプーンを使う時期については、まだ十分な調査がなされていない。他方、Gesellらの研究は子どもたちの食行動を捉えるための広い視野を提供している。今後はさらに、保育現場における実践の観点からの研究も必要だと考えられる。保育現場で保育者がどんな配慮を心がけているか、また食事場面での手指の使い方と、遊びなどそれ以外の保育場面との関連等を見ていくことは、これからの課題だと言えるだろう。

(2) 調査枠組の設定

上記の検討に基づき、本研究では保育現場に即した調査枠組を設定することとした。

スプーンの使い方については、先述の

Gesell & Ilg (1937)に基づき、スプーンの持ち方、スプーンを皿から口まで運ぶ腕の動き、スプーンを口に入れる向きを取り上げて、その実態を探ることとした。

個人票に盛り込む調査項目については、最初に、分析に必要な基本的情報に関する項目を設けた。園名、記入月、記入日、子どもの氏名、生年月日、性別、食べる量、好き嫌いの有無、手づかみをするかどうか、利き手、当日の献立、スプーンの形が含まれる。通常3歳未満児クラスの献立では、子どもたちにとって食べやすいものが出されるよう配慮されている。調査にあたっては、そうした通常の様子が把握できるように、食べやすいメニューの日に記入していただき、特別な配慮が必要な場合については、自由記述項目で汲むこととした。

スプーンの持ち方については、箸に関する山下(1955)の調査枠組を参考とし、フォークに関する伊与田ら(1996)の研究を取り入れて、分類した。また、第一著者が保育者として乳幼児の保育にあたってきた経験や、地域の保育園・認定こども園が箸やスプーンの観察研究を行うのを指導してきた経験を加味して、本調査では持ち方を9種(および「その他」)に分類することとした(図3)。また、食事の状況に関する分類として、腕の動き、口に入れる向きについては、向井(2000)に基づく分類を設定した(表2)。全体像をつかむ観点から、各項目は複数回答可能とした。

また個人票には、その子の食事の際にどんな配慮をしているか、保育者の自由記述欄を設けた。また、本研究では食事場面だけでなく遊びとの関連も視野に入れるため、「遊び場面での様子」の自由記述欄も設け、大きく分けて「見立て、ふり遊び、ままごとのとき」「おもちゃを扱うとき」について、腕・手・手首・指先などの使い方や気づいたことがあれば記入できるよ

うにした。また、可能な場合には写真を添付していただき、電子媒体に保存した上、ファイルネームを個人票に記入していただくこととした。園の業務量を考えて、これら自由記述欄と写真は、可能な場合のみとしている。










①手のひら全体で握りこむ 	②フィンガーグリップ 	③人差し指をスプーンの柄に沿って出す 
④スプーンの端を持つ。 	⑤-1 下から強く握りこむ。 	⑤-2 指を使って下からスプーンを握る。 
⑥下から鉛筆を持つように握る・ペングリップ 	⑦-1 箸とスプーンを使う。 	⑦-2 箸だけを使う。 

図3 スプーンの持ち方の分類










表2 食事の状況に関する分類

腕・手首の動き	①直線的な動き
	②回転の動きが入る
	③すくって口まで持ってくる
	④その他
口へ運ぶ動き	①スプーンが口角から入る
	②スプーンが斜めから入る
	③スプーンが口の中心から入る
	④口に入れる際スプーンを裏返す
	⑤その他

これらの調査項目をまとめた個人票を、図4に示す。

食具の使い方・月別個人票

年 月 日 記入

名前	年 月 日 生まれ		[男 ・ 女]
基本的情報	<ul style="list-style-type: none"> ■ 食べる量 [よく食べる ・ ふつう ・ 小食] ■ 好き嫌い [あまりない ・ 少しある ・ 多い] ■ 食べ方 [手づかみのみ ・ 食具と手づかみ ・ 食具のみ] ■ 利き手 [右 ・ 左 ・ 両方] 	■ 献立(あんかけ・カレー等 食べやすいもの日に)	■ スプーンの形(形・材質など 写真添付も可)
スプーンの持ち方 (番号をチェック)		食事の状況	
<input type="checkbox"/> ①	 手のひら全体で握りこむ(バームグリップ)。	<input type="checkbox"/> 腕・手首の動かし方 (番号をチェック)	遊び場面で様子 ■ 見立て・ふり遊び・ままごとのとき… (腕・手・手首・指先などの使い方で気づいたこと)
<input type="checkbox"/> ②	 親指、人差し指、中指の3本を中心に使い、柔らかくスプーンを握る(フィンガーグリップ)。	<input type="checkbox"/> ① 直線的な動き	
<input type="checkbox"/> ③	 親指、人差し指、中指の3本を中心に柔らかくスプーンを握り、人差し指をスプーンの柄に沿って出す。	<input type="checkbox"/> ② 腕や手首の動きが広がる(回転の動きが入る)	
<input type="checkbox"/> ④	 スプーンの端を持つ。	<input type="checkbox"/> ③ すくって口まで持ってくる	
<input type="checkbox"/> ⑤-1	 下から強く握りこむ。	<input type="checkbox"/> ④ その他	■ 口へ運ぶ動き (番号をチェック)
<input type="checkbox"/> ⑤-2	 親指、人差し指、中指の3本を中心に使い、下からスプーンを握る。	<input type="checkbox"/> ① スプーンが口角から入る	
<input type="checkbox"/> ⑥	 親指、人差し指、中指の3本を使って、下から鉛筆を持つように握る(ペングリップ)。	<input type="checkbox"/> ② スプーンが斜めから入る	
<input type="checkbox"/> ⑦-1	 箸とスプーンを使う。	<input type="checkbox"/> ③ スプーンが口の中心から入る	
<input type="checkbox"/> ⑦-2	 箸だけを使う。	<input type="checkbox"/> ④ 口に入れる際にスプーンを裏返す	
<input type="checkbox"/> その他	(他の持ち方があればここに記入)	<input type="checkbox"/> ⑤ その他	■ 食事に関する保育者の援助(気をつけていること)

※ チェック欄の①～⑦の番号は、発達の順序を表すわけではなく、その子のその時期のありのままを記録してください。

図4 食具の使い方に関する個人票

5. 調査結果（X年9月）

スプーンの持ち方を年齢区分ごとに①～⑦および「その他」に分類した結果を図5

に、「腕・手首の動かし方」「口へ運ぶ動き」の概要については、それぞれ図6・図7に示す。

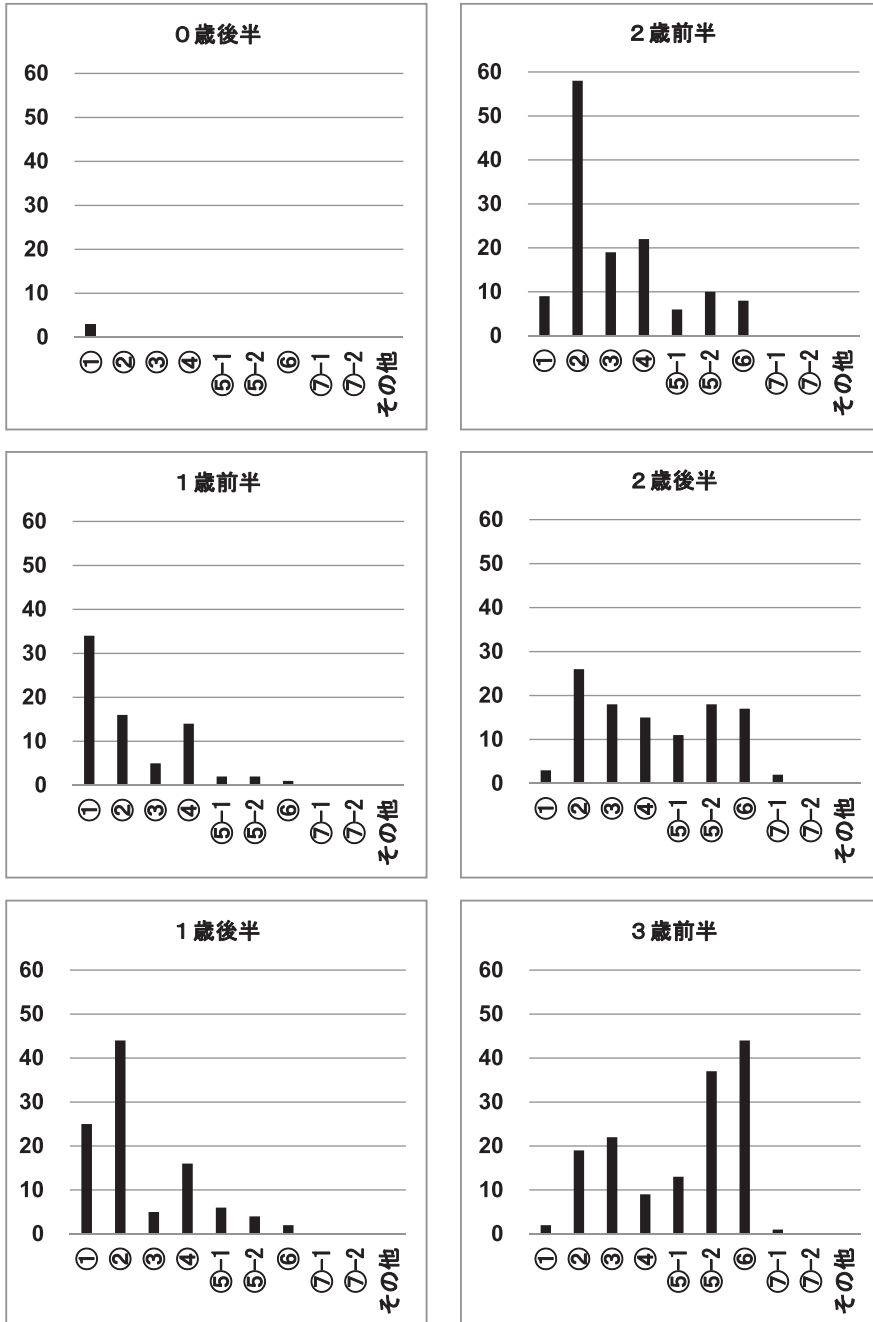


図5 スプーンの持ち方（X年9月）

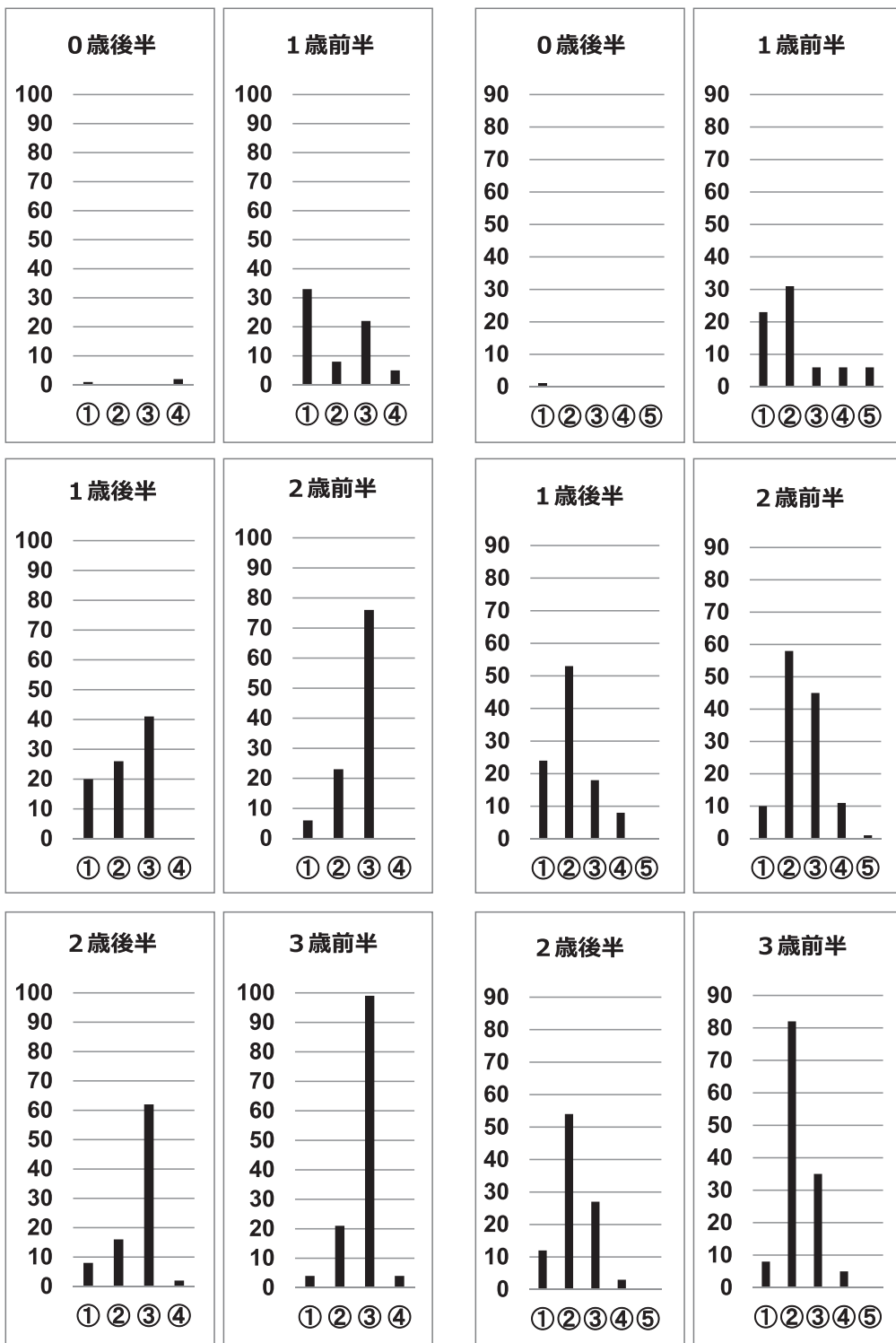


図6 腕・手首の動かし方 (X年9月)

図7 口へ運ぶ動き (X年9月)

(1) スプーンの持ち方について

0歳後半の子どもたちのデータは少ないが、自分で食具を用いるとしても①の持ち方のみとなっている。1歳前半では、①の持ち方が大半を占めるものの、②と④の持ち方も多く見られた。スプーンを固く握るところから、少し持ち方に余裕が生まれ、上握りではあるが、手のひら全体から指を使って握るという動作が出てきている。

1歳後半から2歳前半、すなわち保育園での1歳児クラスに相当する子どもたちになると、それまで優勢だった①の持ち方が少なくなり、②がもっとも多く、④がそれに続くようになる。

2歳後半では、①のように強く握りこむ持ち方よりも、③・④・⑤-2・⑥のように指先を使った持ち方が増えてくるが、個人によっても時によってもさまざまな持ち方が現れることが窺える。3歳前半では、⑤-2・⑥の持ち方が主となり、その他の持ち方、とくに1歳後半から2歳後半まで主であった②はかなり減少している。

(2) 食事の状況

①腕・手首の動かし方

0歳後半から1歳前半では、自分で食具を用いるなら①が優勢だが、2歳後半になると③、つまり自分で口まで運べるようになり、2歳前半以降はこの③がほとんどとなる。

②口へ運ぶ動き

口角から入れる動き(①)は0歳後半・1歳前半に多く見られるが、1歳後半以後は斜めから入る(②)ようになる。③スプーンを口の中心から入れる動きは1歳後半から2歳前半にかけて増加するが、依然として②が主となっている。

(3) 保育者による自由記述

①食事の際の配慮・援助について

X年9月における自由記述のうち、食事の際の配慮・援助についてまとめる。全体

像をつかむために、(a)0・1歳児クラスでの介助が必要な時期と、(b)1・2歳児クラスでの自分自身でかなり食べられる時期に分け、保育者の記述の主立ったものを示す。また、そうした配慮・援助の背景にある、(c)保育者の思いについても取り上げる(表3)。

表3 食事の際の保育者の援助

(a) 0・1歳児への援助
<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの観察と理解：子どもの様子をよく見て、それに応じて介助する。 ・保育者のかかわり：タイミングよく、テンポよく介助することを心がける。「おいしいね」など、楽しさを共有する言葉をかける。 ・咀嚼：保育者が「もぐもぐ」する動きを見せるなどして、咀嚼を促す(子どもは保育者の口元もよく見ている)。 ・食べる姿勢：姿勢が傾きがちな子の場合、椅子にクッションを置いてあげるなどして、姿勢を保ちやすくする。椅子の高さを調節して、腕を動かしやすいようにする。 ・家庭との連携：子どもがどんなふうに食べているか、家庭でもよく見てもらうよう話し合う。
(b) 1・2歳児への援助
<ul style="list-style-type: none"> ・スプーンの持ち方：手づかみも認めながら、スプーンへと徐々に移行できるよう促す(1歳児)。持ち方を意識できるよう促したり、一緒にしてみせたりする(2歳児)。 ・一口量：スプーンで一口分をすくうとき、自分で適切な量に注目できるように促す。その子の意欲をそがないように、「少し多いね」と声をかけながら減らしてあげるなど配慮する。 ・咀嚼・マナー：口を閉じて食べること、食器に手を添えることなども伝えていく。 ・楽しい食事のための援助：子どもが自分で完食できたと感じられるように量を調節する。偏食がある子でも、楽しいと感じられるように心がける。

(c) 保育者の思い
<p>・発達に沿って：子どもたちの食べる意欲は強いが、食具を使いこなして食べるのは、発達的にはまだ難しい。できないところは介助しながら、無理強いせず、時が熟してできるようになることを願って援助している。まずは「ああおいしかった」と思うところから出発して、その体験を通して、一人でできるようになる過程を支えている。</p> <p>・子どもの思いの尊重：食べたい気持ち、楽しむ気持ちを大切にして、かわっている。好き嫌いなども、全部受け止めながら、子ども自身の取り組み、工夫も大切に育みたい。</p>

年齢層を大まかに分けてはいるが、「子どもの観察と理解」など、多くはどの年齢にも共通する配慮だと言えるだろう。その上で、(a)のように幼い子どもたちには姿勢や咀嚼を支える基本的な支援が、(b)のように少し大きい子どもたちには持ち方、一口量など、より進んだ取り組みが心がけられている。いずれにおいても、食具が十分使いこなせなくても、自分自身で食べようと取り組み、喜びを見出す子どもたちそれぞれのあり方を、保育者が受け止め尊重することは同じである。

②遊びとの関連

X年9月における自由記述のうち、遊び場面での手の使い方に関するものをまとめる(表4)。

表4 遊び場面での手の使い方

(a) 見立て・ふり遊びのとき
<p>・見立て遊びは年齢が上がるにつれて言及が増え、幅も広がっている。ペットボトルのおもちゃを注いで飲むような遊びをしたり、お皿に乗ったチェーンリングを食べるまねをしたり、ボールに素材を入れてお玉でかきまぜたりする際、手首をひねって取り組む様子が見られた。</p>

(b) おもちゃを扱うとき
<p>・0歳児高月齢では、積み木などを手のひら全体でつかむところから、親指・人差指・中指を使ってつまむ動きへと、だんだん変わっていく。</p> <p>・1歳児は、シール剥がしやテープ剥がし、チェーンリングなどの遊具が用意されていて、指先を十分使って遊べるよう配慮されている。</p> <p>・2歳になると、積み木に加えて、ブロック、ひも通し、積み木、容器の蓋を回して閉めるなど、遊びの幅が広がっている。</p>
(c) 保育者の気づき
<p>・この自由記述に取り組む中で、食具の持ち方と、遊び場面での手の使い方には関連があることに気づき、子どもの発達をより注意して見る事ができたとの記述が見られた。</p>

遊びの中の手や手首の動きに注目するとともに、保育者の観察やかかわりに関する気づきも記入されていたことは、保育的観点からは意義あるものと考えられる。

6. 考察

(1) スプーンの使い方について

食具を持って食べるということは、手指の発達、目と手の協応の発達などに伴って徐々に進む過程であることを、今回の結果からも改めて認識させられる。その変化の過程は、子どもたちがその時期の自分に合ったさまざまな持ち方を試みる中で進んでいくことが分かる。

調査結果より、食具としてスプーンを使いこなす上で重要となる、持ち方、腕・手首の使い方、口へ運ぶ動きのいずれも、大人に近い形が優勢となるのは、2歳児クラスの後半(実年齢では3歳前半)であることが見て取れた。スプーンを使いこなすという課題は、3歳未満児クラスの時期全体を通して達成されていくものであると考えられる。

スプーンを使い始め、上握りから始めて少しずつ慣れていく時期、とくに1歳前半・

後半には、持ち方、腕・手首の使い方、口への運び方のいずれにおいても、一つの型だけに集中するのではなく、多様性が見られる。子どもたちが食具を使いこなしていく過程には、一人ひとりさまざまな試行錯誤があることが分かる。

持ち方について、⑦のように箸を使用・併用する子どもが少なかったのも、0歳からのおよそ3年をかけてスプーンを使いこなしていく時期にあることから考えれば、自然なことである。この時期は、スプーンにしても箸にしても、上達を急がせるような時期ではないようである。こうした子どもたちの実態を踏まえることが、保育者の援助を考えていく上でも有用であろう。

(2) 保育者の援助・配慮について

この時期の子どもたちは自ら食具を使って食べようとする意欲をもっているが、とくに0・1歳児は、保育者からの介助が必要な時期である。保育者は、子どもたちが食具に関していまだどんな状況にあるのか、その子の食べるリズムや動きなども、よく見て理解し、一人ひとりに合ったこまやかな援助を行うことが必要であろう。

1・2歳児は自分自身で食べることが上手になってくる。手のひら全体で握るところから始まって、やがて指先を使えるようになり、肘と肩が連動して動きが軽やかになってくる。その動きにもまた、一人ひとりにさまざまな違いや個性がある。

個人票には、食事の際の保育者の援助についてさまざまなコメントが書かれており、保育者がデータを記入するだけでなく、その子の持ち方をよく見ることを通じて、一人ひとりへの援助のあり方について考えを深められていることが窺えた。保育者からは、手の動きや口への運び方など、子どもの状況をより詳細に見ていこうとする試みに共感していただいた。保育者の援助のあり方を問いかけるようなコメントも記入

されており、高い関心が感じられた。この調査を機に、食具に関する援助や、その保育全体とのつながりについて、折りに触れて話し合うこともできたが、実践研究はこうした現場との連携によって支えられていることを改めて感じさせられた。今回はX年9月のみの結果を通して概観をつかむこととしたが、今後は調査期間全体を通しての理解を深めていきたい。

文献

- Gesell, A. & Ilg, F. L.: Feeding Behavior of Infants: A Pediatric Approach to the Mental Hygiene of Early Life. Philadelphia, 1937, J. B. Lippincott Company.
- 広沢洋子・鳥居登志子・山本潔・石黒清子・紺野フチエ：保育所における箸の使い方について，埼玉県立衛生短期大学紀要，15，85-91（1990）。
- 一色八郎：箸の文化史，東京，御茶の水書房，1998。
- 伊与田治子・足立己幸・高橋悦二郎：保育所給食の料理形態との関連からみた幼児における食具の持ち方および使い方の発達の变化，小児保健研究，55(3)，410-425(1996)。
- 丸山尚子 編：子どもの生きる力は手で育つ，愛知，黎明書房，2008。
- 向井美穂 編：乳幼児の摂食指導——お母さんの疑問にこたえる，東京，医歯薬出版株式会社，2000。
- 山下俊郎：改訂 幼児心理学，東京，朝倉書店，1955。
- 谷田貝公昭 編：現代「不器用っ子」報告，東京，学陽書房，1986。

謝辞

本研究は、日本保育学会第72回大会(2019)での発表を敷衍したものである。

調査に協力いただいた保育現場の皆様と子どもたちに感謝いたします。